

魔法の Wallet プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：三ヶ尻 あや 所属：宮崎県立清武せいりゅう支援学校 記録日：2020年 2月11日
キーワード：コミュニケーション、VOCA、進路

【対象生徒の情報】

- 学年 高等部2学年 17歳 Aさん
- 障害名 先天性ミオパチーによる両上肢機能障害、体幹機能障害
- 障害と困難の内容 重度重複障がい

【活動目的】

- 当初のねらい
 - ・ 高等部卒業後の進路や夢の実現に向けて、必要なコミュニケーション能力の育成。(自分が伝えたいことを確実に伝えることができる。)
 - ・ 「将来一人暮らしをしたい」という目標に向け、Aさんの意思で選択する場面を保護者と共有し、成功体験を積み重ね、状況に応じて支援を求めるスキルを身に付けるように学習計画を立てる。
 - ・ 新しい手立てや補助具等を提示することにより、Aさんがさらに良いコミュニケーションの方法に気付き、効果を体験し実感できる経験を重ね、スキルアップへの探究心を育むように学習計画を立てる。
- 実施した期間 令和元年6月から令和2年2月現在
- 活動実施者 三ヶ尻 あや
- 実施者と対象生徒との関係 副学級担任

【活動内容と対象生徒の変化】

- 対象生徒の事前の状況

身体・健康面について

- ・ 人工呼吸器を装着し、口腔内・気管切開吸引、胃ろうの医療的ケア対象。電動車いすで過ごす時間は、主体的に過ごしている。
- ・ 電動車いすからベッドへの移乗を午前中2回、午後1回行い、側弯予防や疲労回復のためにベッドでリラクゼーションを行い、心身の安定を図りながら学習に取り組む。
- ・ 先天性ミオパチーが起因となる握力の低さがあり、物を握りしめたり、手先に力を入れたりすることに困難である。

学習面について

- ・ 「太田ステージ StageⅢ-2 35」と実態把握としておさえている。
- ・ iPadの「メモ」、「Pages」のアプリケーションで簡単な文章で伝えることができる。
(例) オレンジのリップが欲しかったのですが、高くて買えませんでした。残念でした。
- ・ 文字を書く意欲はあり、筋力の低下による手指の巧緻性等から道具の操作(鉛筆のキャップを外す、軽ゴムで消す等)一人で操作することが困難なため、支援を要する。
- ・ 筆記の際、握力の低さから、斜め線を垂直に書くことや、部品の配置捉えることや、形を捉えることが難しい。
- ・ 姿勢保持の支援を行い書きやすい姿勢をとることで、文字を書く動きを引き出すことができる。
- ・ 既習した漢字の筆記について、正確に書くことができているか教師と確認が必要である。
- ・ 日記や作文は、ひらがな、カタカナ、漢字交じりの文章で簡単な感情を表現している、パターン化された文章は書くことができる。

コミュニケーションについて

- ・ 吸引、水分摂取、排泄、人工呼吸器の電源、日常使用する機器等に関する支援の要求頻度の高いものは、カードでの指示やサインで行うことができている。
- ・ 人工呼吸器の装着により発語が不明瞭である。学校生活では教師や周囲の人へ自分から伝えることや、言葉でのやりとりはない。ただし、保護者とは、送迎の車中で学校の出来事、休日の外出先について等、会話を楽しむことができている。
- ・ 日常会話は教師からの質問に対して「はい、いいえ」と顔でうなずいたり、横に振ったりして応答することができる。生徒から質問する場面はなく支援者主体のコミュニケーションである。
- ・ iPad、iPhone で、合成音声の読み上げ機能を使用している。
- ・ 日常の挨拶等、パターン化しているものはアームで固定された iPhone の「Drop Talk」で、あいさつ用のキャンパスを作成し、「読み上げ機能」を活用している。朝の会、帰りの会の司会や、係活動に必要な話型を事前「Drop Talk」のキャンパスに自分で編集することができる。授業で発表する時は、発表内容をメモアプリに入力し、読み上げ機能で発表している。メモアプリだと、文章を先後まで入力してからの読み上げになることから、相手を意識してその場で文章を入力することに、ストレスを感じるのではないかと考える。
- ・ iPad、iPhone を使用する会話では、自らの言葉を入力することは難しく、「楽しかったです」「勉強になりました」等、パターン化した内容で表現する際は、教師が質問の意図に沿うように、発問内容に対して書ける支援をしている。
- ・ 自分の気持ちや感情を伝えることに関して、周囲へすぐに支援を求めることはできている。周囲が A さんの気持ちを察しながらかわり、支援を求めたり自分の気持ちや感情を伝えたりする、成功体験を重ねることができるようになっている。
- ・ 話し合い活動では、日頃の A さんの思考、意見の内容を把握し、A さんの発言を想定してから、教師と確認し合い iPad へ入力し、発言する場面を伝えている。

・指導の仮説

A さんはこれまで DropTalk を活用した挨拶や、報告等を行うことが定着している。これは、DropTalk の機能と活用目的が有効であることを A さんが成功体験を通して、生活に役立つことを実感できた成果である。DropTalk で、挨拶だけでなく係の仕事等、パターン化している発信は、自発的にキャンパスを作成することができている。この発信が学校や事業所で過ごす時間の、A さんのコミュニケーションの柱となるスキルである。

高等部卒業後は、自分から、話し掛けることができるようになりたいと考えている。「話し掛ける」のような自発的なコミュニケーションを図ることができるようになるのは、将来、一人暮らしをしたいと考えている A さんにとって、必要不可欠な力だと理解している。医療的ケアを必要としている A さんが一人暮らしを実際に行くと、10数名のヘルパーさんが24時間体制でかかわることになる。ヘルパーさんへ、介助や支援を依頼する際のコミュニケーションは不可欠である。また、様々なヘルパーさんとコミュニケーションが図ることは、高等部卒業後の生活につなげていくために必要な力である。

A さんの発達の段階、興味・関心の実態から、今後も継続したコミュニケーション力を高める必要がある。そこで、コミュニケーション力を高める基礎となる興味・関心のある話題で、大人を介した会話や DropTalk でのやりとりを繰り返し行う。人とやりとりをすることの楽しさを実感し、スモールステップで会話の内容を深めていくことで、コミュニケーションの質を高めていく。卒業後を見据えて、生活に必要な支援を受けるためのツールを学校、家庭で使用し、学習の連続性を保持して、人とのやりとりの有効性を実感できるようにする。更には、新たに A さんから要求等見られる際は教師と保護者で共感し喜びにつなげ、対応できる幅を広げていくようにする。

以下の仮説を立てて、A さんが発信するコミュニケーションについて検討した。

→ Aさんに合ったアプリを活用して語句や文章表現をすれば、日常生活のコミュニケーションが広がるであろう。

○ 活動の具体的内容

Aさんとのやりとりをさらにスモールステップで行うこと。やりとりにタイムラグが生じて、人に伝えたり、伝え合ったりする楽しさが喜びに繋がるように、伝える相手との興味・関心のある話題で伝え合う活動を設定する。さらに伝えることで助かった経験、得をした経験、知らない人とのやりとりで対人関係に自信がつく経験を通して、自分のことを伝えたいという気持ちが引き出せることを考えた。Aさんの経験させたいやりとりの場面設定等の、環境づくりの工夫が必要であると考えた。

以下のような実践を行った

Aさんが主体となり、やりとりを広げるツールとして

実践 I Aさんの主体性の捉えや学びの環境調整を探る

実践 I-①コミュニケーション手段を用途に応じた使い分け

実践 I-②産業現場等における実習の取組

実践 I-③Aさんとのやりとりについて

Aさんの進路に向けた取組として

実践 II 高等部卒業後の生活(将来一人暮らし)に向けたステップの確認

実践 II-①実践 II-①マインドマップで自分の気持ちを整理 (ステップ1)

実践 II-②実践 II-②マインドマップで挙げた項目をロイロノートで整理 (ステップ2)

実践 II-③実践 II-③これから取り組むべきこと (ステップ3)

Aさん新しい手立てや補助具を受け入れることで生活を豊かにしていこうとする取組として

実践 III 新しい手立てや補助具を提示することにより、コミュニケーション方法・手段を増やす

～DropTalkでアレクサを操作～

実践 III-①『Drop Talk』のキャンパスにアレクサスキルを編集

実践 III-②アレクサのアナウンス機能で係活動

実践 III-③アレクサのリマインダー機能の活用

水分、吸引、排泄、呼吸器の管理はカード
(写真1)



実践 I Aさんの主体性の捉えや学びの環境調整を探る

実践 I-①コミュニケーション手段を用途に応じた使い分け

定着しているコミュニケーションはこれまでどおり、カード(写真1)、DropTalk、しゃべってを使い分けた。

日常の挨拶、朝の会（進行）、係活動は DropTalk



会話、やりとりは
しゃべって



会話は自分が筆記した言葉や文章を相手に見せて会話する筆談の方法で「しゃべって」を使い始めた。伝えようとする際、相手がスクリーンを覗いて A さんが書いた文字を読んで答えてくれる。これまで、メモアプリ等で文章を入力して伝える際、入力している間は、相手を待たせているのではないかと焦ることがあった。「しゃべって」を提示すると、入力方法を受け入れ、伝えたいことを書きながら、相手が読み上げていくスタイルを A さんの判断で始めた。

実践 I —② 現場実習の取組

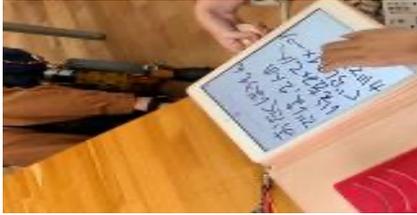
現場実習で同行した保護者に、A さんへの支援を控え、離れた場所で見守りしていただく協力を得ながら2日間過ごした。保護者と教師から離れ、普段関わりのない人の中で過ごすことは初めての体験であった。事前に、A さんと実習先での挨拶や自己紹介は「DropTalk」、やりとりは「しゃべって」のアプリを使用することを確認した。

実習先からいただいたコメント

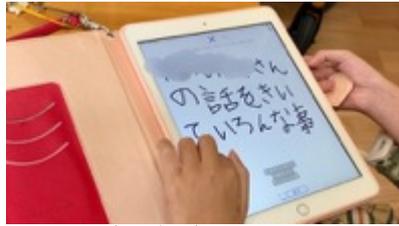
現場実習1回目(7月):自立生活支援センター	現場実習2回目(10月):生活介護事業所
<p>〇〇さん、2日間実習おつかれさまでした。 iPad を使用して挨拶や会話を問題なくできて、コミュニケーションがとれていたと思います。 ～省略～ 緊張していたこともあり、質問を自分からすることはなかったが、受け答えはしっかりしていたと思います。 最後の感想を言う時にもう少し、<u>具体的な感想が聞けたら良かった</u>と思いました。 <u>自分から質問するのが難しそうでした。</u></p>	<p>実習、おつかれさまでした。慣れない2日間でしたがどうでしたか？<u>〇〇さんのやる気スイッチやパワーには利用者さんもびっくりしていた</u>と思います。人生とは本人の夢がないと輝かないものです。困ったらまた遊びにきてくださいね。 ～省略～ 2日間の実習ありがとうございました。先生と生徒さんとの関係に自分たちも勉強させていただきました。今後ともよろしく願います。</p>

実習中の実践者の気付き

<p>A さんが、コミュニケーション力を高める必要性があることに気付き始めた時期であった。「しゃべって」アプリでやりとりの練習を始め出したこと等、A さんが自分のコミュニケーションについて課題を意識し始めたことへの共通理解が図られていなかった。</p>	<p>事業所の実習担当をしてくださった方に、予め、A さんが課題として取り組んでいるコミュニケーション活動や、実習の目標設定を共有させていただくことができた。実習中、A さんのコミュニケーションの良い点を A さんに直接、伝えてくださったことで、自信を付けることができた。</p>
--	--



(写真2)



(写真3)

現場実習の事前学習で確認したとおりに A さんは実習期間中の事業所の方からの質問や教師からのなげかけに「しゃべって」を頻繁に使用するようになる。

(写真2、3)

写真2、3とも1回目の現場実習で感想を伝えるために書いたもの

実践 I -③ A さんとのやりとりについて

A さんのマンツーマンで関わる授業の中で、気持ちを表現し、満たされる時間を設定する。コミュニケーションの内容によっては「人」が相手だと、気持ちの面で難しくなることが予測されることから A さんの安心を保证するために、あらかじめアレクサ、iPad 等で話題の素材を準備した。コミュニケーションとしやすい姿勢に考慮し、疲労を伴う電動車いすからベッドへ移乗し、リラックスできる姿勢で取り組んだ。A さんは、日常会話を保護者だけでなく、教員とアプリを使用してやりとりをする様子が頻繁に見られるようになった。12月後半になると、自分から主体的に教員とアプリを使用してやりとりをするようになり成長を感じた。A さんは、改良したヘルパーさん募集のチラシには「話しかけられることが好き。自分からも話しかけたいです」と記載した。A さんは、日常生活の会話を楽めることで、やりとりの喜びを感じていることを確認した。

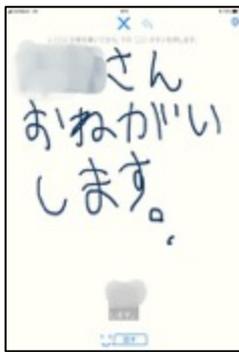
- ・ リラックスしてやりとりする時間を確保する。
- ・ 今、もっているコミュニケーションを安心して出せるためにも、日常生活のやりとりの中で、気持ちを実施者と共有する。
- ・ 時間帯(各教科等を合わせた指導、自立活動、LHR の時間に実施。内容等は学習指導要領を踏まえたものでおさえる)

月曜日	火曜日	木曜日	金曜日
1校時	1校時	1校時	4校時
日常生活の指導	日常生活の指導	日常生活の指導	自立活動
6校時	6校時	6校時	5校時
自立活動	自立活動	自立活動	LHR

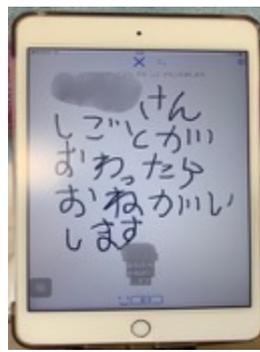
実践 I の結果

～朝の活動の出来事～

日常生活の指導の時間、係活動のやりとりを A さん自ら読み上げ機能を活用して、行う様子が見られるようになった。やりとりの内容は A さんから学級の友達へ仕事を依頼したが、友達から期待していた反応が見られなかった。依頼された友達は他の仕事の最中で、A さんの働き掛けに反応できなかったことを伝えた。A さんにやりとりしようとする友達の状況を理解することや、伝え方の改善を考えることで、発信の内容にも変容が見られた。(写真4、5)



(写真4)



(写真5)

以前は友達の状況を見極めることが難しかった。今は、他の系の仕事をしていることを伝えると、伝え方やタイミング、相手の体調等にも関心を示す姿が見られ始めた。

～Aさんのコミュニケーションの変化～

これまでAさんから会話をする事はなかった。12月後半頃から、自分の日常生活の範囲内での出来事について教師に質問するようになり、楽しんでいる様子が見られる。しかも、Aさんの質問は、話す相手に合わせたもので、Aさんが話し掛けてくると、グループ内の食後の会話が弾み、和やかな時間になることを、一緒にテーブルに付いている友達や教師の様子から受ける。会話として、自分からかかわろうとする相手は教師に限定されている。

実施者への質問

- ・週末は何をしますか？
- ・日曜には何をしましたか？
- ・昨日、観たテレビ番組は何ですか？
- ・観たい映画はありますか？
- ・欲しいものありますか？



初任(新卒)のS先生への質問

- ・クリスマスは誰と過ごしますか？
- ・クリスマスプレゼントは何が欲しいですか？
- ・バレンタインのチョコは誰にあげますか？

実践Ⅱ 高等部卒業後の生活(将来一人暮らし)に向けたステップの確認

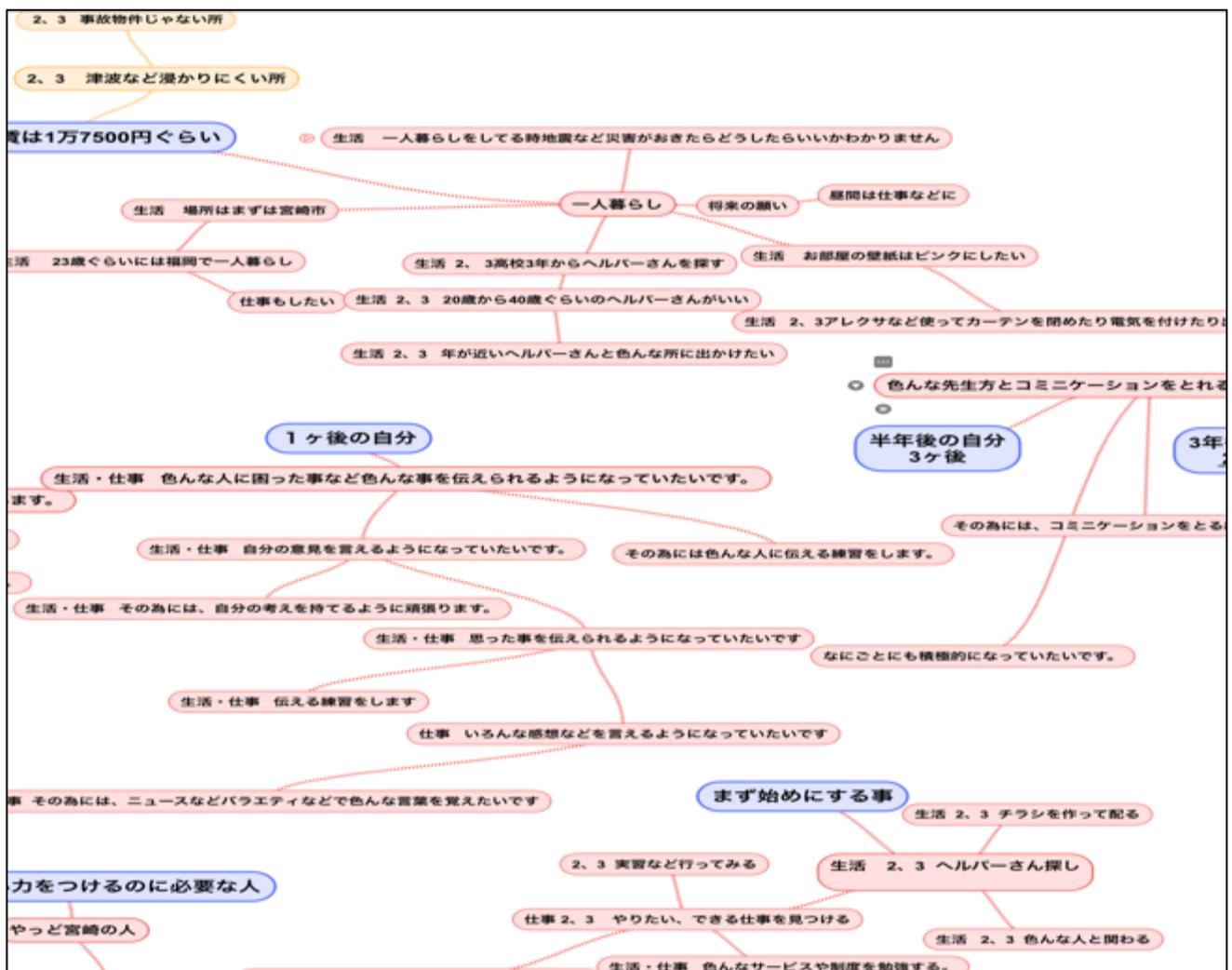
実践Ⅱ-①マインドマップで自分の気持ちを整理(ステップ1)

Simple Mind+



Aさんは高等部卒業後、一人暮らしをしたいと願っている。自分の夢や願い、一人暮らしの生活のイメージ、一人暮らしのために必要なこと、準備しておくことを何だろう?とAさんの気持ちを表現し、整理することを目的に、マインドマップを活用することをステップ1とした。入力のルールはAさんと相談し簡易なものにし、Aさんが一人暮らしに向けて、知りたいこと、興味のあること、やりたいことを、率直にマインドマップで表現した。(写真6)

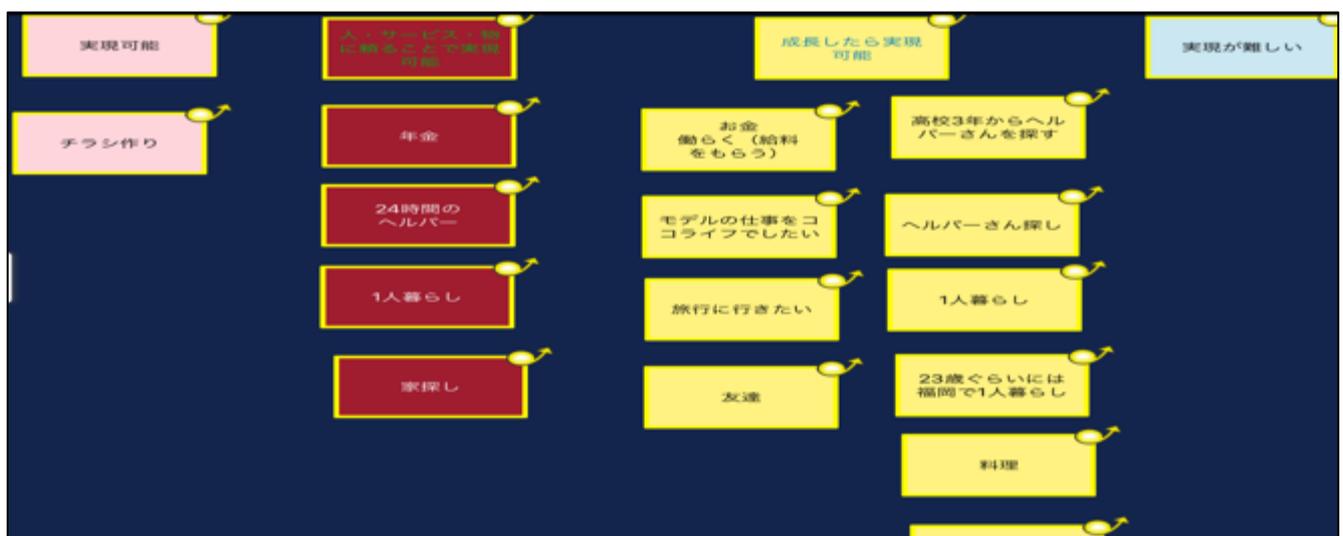
マインドマップに入力した項目:①将来の願い ②3年後(20歳)の自分 ③今できていること ④これから身に付けたいこと ⑤身に付けたい力を付けるのに必要な人 ⑥まずは始めること



(写真6) 一人暮らしに向けてやってみたいことをマインドマップで表現

Aさんがマインドマップに挙げた項目を整理することを次のステップ2(写真7)とした。整理していく中で、Aさんが現実的な課題に気付き、最も優先して取り組むべき項目は何なのか、Aさん自身が選択し、取り組むことが有効であることに気付いた。

実践Ⅱ-②マインドマップで挙げた項目をロイロノートで整理(ステップ2)



(写真7) ロイロノートの活用

実践Ⅱ-③これから取り組むべきこと(ステップ3)

マインドマップに挙げた項目を「①実現可能 ②人・サービス・物に頼ることで実現可能 ③成長したら実現可能 ④実現が難しい」をロイロノートに分類、整理した。Aさんは、「②人・サービス・物に頼ることで実現可能」と思っていた項目の中に、「③自分が成長すれば可能」である項目が多いことに気付いた。「④実現が難しい」の項目は挙がらなかった。

Pages

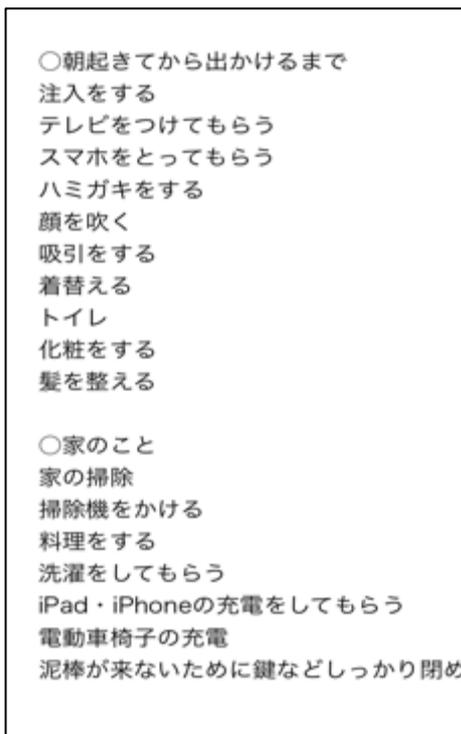


ロイロノート

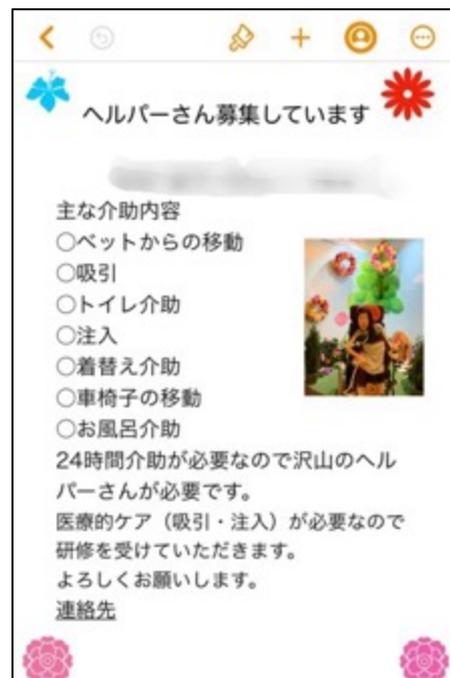


ロイロノートの取組からAさんは、一人暮らしに向けて取り組むべきことを以下の3つを選択した。

- ① Aさんに必要な介助・支援を保護者、教師以外の人へ伝えるためのツールを作成する。そのためにはAさんがまず、自分に必要な介助・支援(写真8)を理解する必要であるため、Pagesに入力する作業に取り組んだ。ツールは現在、検討・作成中。
- ② 高等部卒業後、一人暮らしを実現するために、理解者を増やすことや、ヘルパーさんを探す。ヘルパーさん募集のチラシをPagesで作成した。更に改良したものを作成中。(写真9)
- ③ 自立支援センターで、自立支援プログラム等を経験していくことを確認した。



(写真8) 自分に必要な介助・支援(一部)



(写真9) ヘルパーさん募集のチラシ

実践結果2

ステップ1、2の活動でどうしてもやりたいことを実現するために、取り組むべきことを導き出す作業ができた。自分の気持ちが表現できたからこそ、Aさんの願いを、周囲が理解し、進路の方向性を確認することができた。この取組について、保護者はもとより、進路指導主事へ、マインドマップ、ロイロノートの活動、Aさんの変化等を伝え、共有することができた。Aさんの担当相談支援員を交えた進路支援会議では、Aさんは自分がやりたいことを伝え、思いや願いを共有することができた。

実践Ⅲ 新しい手立てや補助具を提示することにより、コミュニケーション方法・手段を増やす。

～DropTalk でアレクサを操作～

休み時間は医療的ケア等で、周囲の友達と自分から関わることや働き掛けが少なくなってしまう。アレクサを友達と主体的なコミュニケーションを図る目的のツールとして活用した。意図的に友達とかかわる場面設定をすることで、「もっといろんな経験をしたい」という刺激になると考える。

実践Ⅲ-①『Drop Talk』のキャンパスにアレクサスキルを編集

Alexa



アレクサスキルを DropTalk のキャンパスに編集して、キャンパスを友達にプレゼントした。(写真10)



実践Ⅲ-②アレクサのアナウンス機能で係活動

周囲が聞き取りにくい状況の時、アナウンス機能で朝の会、作業学習の係の仕事に取り組めた。「時間割をお知らせします」「作業のファイル集ます!」等、自発的に A さんが入力して、タイミング良くアナウンスができていた。

(写真10) 友達にプレゼントしたキャンパス

実践Ⅲ-③アレクサのリマインダー機能の活用

予定の変更や吸引時間、送迎時間をリマインダーに追加入力して、スケジュールを周囲に知らせることができた。A さんが保護者・事業所の送迎時間、下校前の吸引時間を調整し、入力することで、下校時間を間違えずに慌てず、余裕をもって下校準備をする等の利便性に気付き、主体的にスケジュール調整・活用することができた。

Amazon Alexa



実践Ⅲの結果

アレクサを自分に合った使い方を工夫することは、将来の生活につながっていくことを理解していると考えられる。アレクサにカーテンの開閉や家電を操作してもらうことがマインドマップの項目として挙げられていた。この経験を通して、日常生活のツールの一つとして使い、自立した生活の中で、自ら使うことの有効性を実感し、理解へつながった。

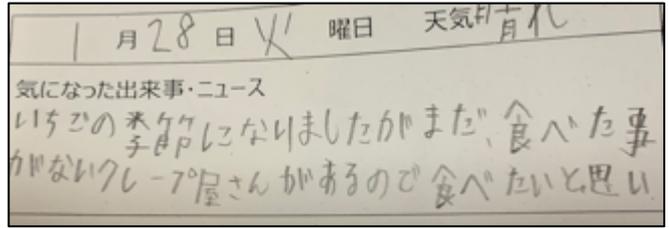
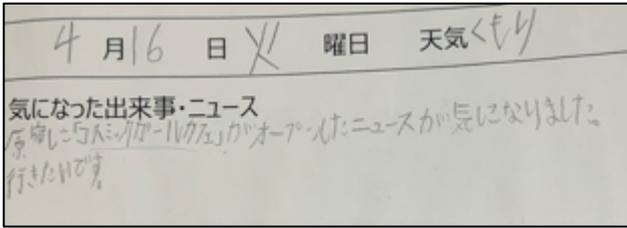
【報告者の気づきとエビデンス】

○ 主観的気づき

- ・ 自分に合ったアプリを見付けることで、コミュニケーション力を引き出すことができたのではないかな。
- ・ 自分のやりたいことを伝えることが、楽しい生活を送ることができると気付いたのではないかな。さらに、自立した生活を送るために必要であることを感じ始めたのではないかな。

○ エビデンス

- ・ 当初、「しゃべって(アプリ)」を活用した筆談として、一文を書いて読み上げていたが、正確な読み上げが難しく、文節ごとに入力をして、読み上げを繰り返すことで相手にわかりやすく伝わるのではと相手の立場に気付いたことを感じている。アプリに筆記した文字のバランスによっては正確に読み上げができないことから、筆記する文字のバランスも意識するようになった。(写真11) これまで、パターン化されていない短い文章を書くことが苦手であったが、以前より書いたり、入力したりして表現しようとする姿が見られる。(写真12)



(写真11) 筆記する文字のバランスの意識の変化について

校外学習の思い出
 6月26日の午後空港の1階と2階で私と先生と色々なお店を見ました。
 一階のお店でアイスを食べました。
 自分で注文は出来なかったのですが、自分でお金は出せたので良かったです。

生徒会選挙に立候補した高等部2年〇〇〇〇です。
 私が生徒会選挙に立候補した理由はいろんな事に挑戦したいと思ったからです。
 私は普段からイベントなどに積極的に出ています。
 学校の中でもいんな事に積極的にチャレンジしたいと思いました。
 私の公約は、笑顔が絶えない学校にしました。
 この公約にした理由は、もっと笑顔が増えたらいいと思ったからです。
 みんなが笑顔になると幸せな気持ちになります。
 私が生徒会選挙に当選したら笑顔が絶えない学校にします。
 笑顔が絶えない学校にするには、誰とでもたくさん会話をします。
 それから自分から笑顔で挨拶をするようにします。
 絶対がんばりますので、私に1票を入れてください。
 お願いします

(写真12) パターン化されていない文書の変化について

- ・ 心身をリラックスしてやりとりする時間を確保し、今もっているコミュニケーション力を安心して出せる環境づくりを行った。日常行っているやりとりを設定することで、さらにリラックス効果を高められた。
- ・ Aさんの発達の段階として、教師及び外部も含めた関係者が、Aさんの実態の共通理解を図り連携を図ることにより、Aさんの成功体験につながる事ができた。Aさんの実態として、体験を実感できる具体的な場面での、シンプルな操作のアプリを使用することが大切である。Aさんの成功体験を関係者が共に喜ぶことを共有することがさらなる成長につながると考える。

今後の展望

○ 学校生活を送る上でコミュニケーション

Aさんの実態から、人とのやりとりをすることの楽しさ・喜びを繰り返し体験し、実感できることである。今回、保護者以外の教員とも主体的にやりとりをする様子が見られて喜びを実感してきている。この成長過程と指導内容を確実に次年度へ引き継ぎ、Aさんが引き続き、主体的にやりとりをすることができる環境づくりが必要である。

Aさんのコミュニケーション力を支援するために、DropTalk、しゃべって等、今回使用したアプリの有効性も確認できた。日常生活の中で、教師が、Aさんの興味・関心からの内容を大切に、会話内容に制約をかけないことが大切であり、Aさんが、気持ちを解放できることを指導・支援の共通理解としていく。

○ 卒業後の生活に向けて

卒業後に向けて、スキルアップを行う必要がある。Aさんの実態からスキルアップとして、卒業までの1年間の指導計画を保護者、進路先、校内で共通理解を図る必要がある。①Aさんが主体的に支援を求められることができる内容の整理、②現在、Aさんが身に付けていないやりとりの内容で、Aさんが今後習得できる内容であるか、支援者の支援を受けなければやりとりができない内容であるか、についての分析と整理、③②で整理した内容の中で、Aさんが習得できる内容への指導の充実、Aさんが支援を受ける必要があることについての支援ツールの作成及び卒業までに関係者間で検討し、Aさんの支援をどのように行っていくかを今後早期の段階から行い、Aさんと支援者がスムーズに、卒業後の生活を迎えることができるようにすることである。

Aさんが一人暮らしに向けた取組として、「P8、実践Ⅱ－③これから取り組むべきことステップ3」に記載している。また、将来的に「P9、実践Ⅲアレクサの取組」からアレクサ等を生活に活用できることを実感している。Aさんは次年度、アレクサを購入し、家庭で活用することを検討している。

高等部卒業までの残り1年間、Aさんが望む暮らしが実現するために、Aさんが考えている暮らしや、条件に必要なサービスや制度、支援体制を確保することをAさん主体として進めていきたい。今回の実践で行ったコミュニケーション活動をベースに、一人暮らしをする上で、支援者・仲間づくり、安心できる環境づくりへと広げていきたい。卒業後も安心して生活する上で、支援の連続性を生涯にわたり受けしていくこと、生活の場、就労先等へ支援者が確実に引き継ぎを行い、確認することが大切であると考えます。